

広島土砂災現場を視察 東大復興デザイン研

復興デザインスタジオ開講

東大復興デザイン研究体は2日、広島土砂災害の現場を視察した。2015年度の活動の1つとして、広島土砂災害を対象に復興デザインスタジオを開講する。スタジオ演習の中で現場に對しどのような提案ができるかを考える。今月から授業を開始、7月中旬の最終公表・審査を予定している。

Ⅱ3面参照

を実施した。

2日の現地視察では、広島市都市整備局都市整備調整課の職員の案内で被災現場を訪れ、被災状況や復旧状況、復興計画の概要など（砂防堰堤、都

市計画道路長束八木線整備、ワイヤーセンサー設置など）の説明を受けた。地元とは、市がまとめた復興まちづくりビジョンの内容や仮設住宅の状況、コミュニティーに関して意見交換した。住民は「防災のみならず減災の意識が重要だ」との認識を示し、同研究体が掲げる「事前復興」の取り組みに賛同する声が出た。今後の予定は、5月17、18日に参加する学生全員が再度現地調査を実施し、7月中旬

同研究体は、東大工学系研究科の社会基盤学、建築学、都市工学の3専攻が中心となり、民間企業からは復建調査設計とアジア航測が参加し活



動を支援している。活動の一端として、大学院生向けのスタジオ型演習を開講しており、3専攻の学生が参加し、さまざまな災害復興について、現地調査から復興デザイン、さらには都市的なスケールから建築的なスケールまで一貫して提案することの特徴としている。

15年度は、広島土砂災害を調査対象として取り上げる。こととし、事前リサーチのために担当教員と院生が現地を訪問し、土砂災害の現場視察、行政・地元住宅との意見交換

